# 報告

# 「慰安婦」問題、あなたの意見は？
# 結論を出す前に見ておくべき『主戦場』

## 映画『主戦場』とミキ・デザキ監督によるトークセッション

出口 真紀子
大嶋 徳
栗山 海陽旅

開催日: 2023 年 7 月 6 日（木）
登壇者: ミキ・デザキ（ドキュメンタリー映画監督、Youtuber）
進行: 出口真紀子（上智大学グローバル・コンサーン研究所）
参加者: 330 人

**企画の背景と概要**

『主戦場』は慰安婦問題を扱ったドキュメンタリー映画で、2018 年の釜山国際映画祭で上映され、2019 年 4 月から東京・渋谷のイメージフォーラムで公開、10 ヶ月の異例のロングランとして上映され、全国各地の 44 館でも上映された。韓国では 2019 年 7 月に全国一斉公開され、大きな反響を呼んだ。

今回は『主戦場』の上映会とミキ・デザキ監督によるトークセッションを開催した。その背景としては、デザキ監督と配給会社東風に対して、映画『主戦場』出演者の一部が、映画の上映差し止めや損害賠償などを求めた裁判の上告審決定が 2023 年 3 月 30 日になされ、原告らの訴えをすべて棄却し、デザキ監督と配給会社東風の全面勝訴が確定したことがある。改めて『主戦場』を上映し、デザキ監督にその後の心境や、海外の大学で数多く上映してきたことから海外の観客の反応などを伺えればと考えた。

当日の事前登録者数は 450 名を超え、300 人以上の来場があり、大勢の方に関心を持っていただけたことは主催側として大変嬉しく思っている。また、この映画はデザキ監督が上智大学グローバル・スタディーズ研究科を 2018 年に修了され、修士論文に代わるものとして制作されたという経緯からも、ホームカミングの意味合いもあり、感慨深いイベントであった。

映画上映後は、デザキ監督のトーク（ファシリテーター・出口真紀子）のあと、観客との活発な質疑応答が行われた。勝訴にあたってデザキ監督は「相手の訴えは典型的なスラップ訴訟で、勝つ自信があったとはいえ、やはり嬉しい」と安堵した心境を語った。多くの観客にとって初めて『主戦場』を観る機会となり、映画やトークへの感想は大変良好だった。これからもこの映画をより多くの学生に観てもらい、慰安婦問題への理解を深め、未だに解決されていないこの問題を考え続けることを願いたい。

出口 真紀子（でぐち まきこ）
（グローバル・コンサーン研究所、上智大学外国語学部）

**感想①**

映画『主戦場』は、「慰安婦」問題が単に過去の問題なのではなく「現在進行形」の問題だということを、まざまざと突き付けてきた。映画冒頭で、サバイバーである李容洙（イ・ヨンス）ハルモニが語った「なぜ私たちを二度も殺そうとするんですか？」という問いに、私は打ちのめされるような衝撃を受けた。私は、当事者を「二度も殺そうとする」社会の問題を「解体」し、どうサバイバーの声に応答していくのかについて考える必要性に迫られたのである。

映画に出てくる街頭インタビューで、多くの日本人は「慰安婦」問題について知らなかった。私自身も「慰安婦」という用語は知りつつも、「複合的人権侵害」[1]だという問題の本質を知らずに生きてきた。映画で、展開されていた否定論者のネガティヴ・キャンペーンは、「慰安婦」問題を学校教育において不可視化し、「最終的かつ不可逆的」に解決された（とする）2015 年の政府間合意は、「もう終わった」過去の問題であるという意識を植え付けようとしてきた。この同年に、父親に説明なく連れていかれたソウルの日本大使館前の少女像を訪れた際、私はそこから悲痛な声を聴きながらも、問題の本質を理解することはできなかった。

しかし、私はこの映画でサバイバーの生々しい「語り」に出会った。「慰安婦」にさせられた経験、「戦後」の沈黙、名乗り出後のセカンドレイプといった差別的で暴力的な「現実」(reality)。これらを清算できず、寧ろバックラッシュを強めている社会の問題と暴力性が可視化されたのである。そして、差別と暴力を作り出し、サバイバーを排除してきた社会の連続性に私がいるという「連累」の意識から、私はこの問題を私自身の問題として捉える必要性を切に感じるのである。

また、否定論者の聞くに堪えない性差別的発言、「慰安婦」問題を葬ろうとする姿勢からは、今現在を生きる性暴力被害者にも「沈黙」を強いる社会の問題が見えてくる。藤目は、「慰安婦」を不可視化する状況を「レイプされても口を閉ざしていなければもっとひどい目にあうという恐るべき実例を見せつけ、性暴力を受けたときには泣き寝入りをするのが最善の道だと教えこむ、若い世代への生きた性教育」[2]だと指摘する。否定論者の家父長制と性差別に裏打ちされた主張は、「慰安婦」制度の被害者だけでなく、今、そしてこれから「沈黙」させられる人を生み出しうる「生きた性教育」なのである。

本映画は、「慰安婦」問題をめぐる争点を一つ一つ取り上げることで、サバイバーの悲痛な「語り」の背景にある問題を可視化した。家父長制、植民地主義、売春パラダイム、一国主義的歴史観といった諸問題は、現在も日本社会に生き続け跳梁跋扈している。否定論者が躍起になって終わらせようとする「慰安婦」問題は、決して終わっていない現在の問題なのだ。私たちは、もうこの悲痛な「語り」が生み出されることがないように、サバイバーの「語り」に深い尊重を持ちつつ、ここから学び続ける姿勢を持ちたいと願うのである。

大嶋 徳（おおしま とく）（上智大学総合グローバル学部学生）

---

[1] 吉見義明，1995，『従軍慰安婦』，231 頁，岩波書店.

[2] 藤目ゆき，2022，『「慰安婦」問題の本質――公娼制度と日本人「慰安婦」の不可視化〔電子書籍版〕』，38-39 頁，白澤社（Kindle 版，2024 年 1 月 20 日取得）.

**感想②**

本作品は「日本政府の戦後補償責任の追求と明示」を目的に、日韓「慰安婦」問題論争の中心人物 27 名の証言を歴史文書及び映像資料と照らし合わせながら反証させることで、日本右翼主張に見られる矛盾点や非論理性について指摘していくストーリー構成となっていた。

興味深かった点は、右翼側の「証拠」への固執姿勢である。「一貫性のない証言は証拠にならない」「強制連行への日本軍関与に関する資料は残っていない」など相手の主張に証拠がないことを指摘する一方、自らは「朝日新聞が報じた吉田清治の証言は嘘である」とする証拠否定や「少女像建設の背景にはプロパガンダを目論む中国がいる」という憶測の正当化により修正主義的主張を行なっていた。こうした右翼側の「被害者の尊厳回復」よりも「ナショナリストとしての威信保護」を優先する利己的態度は、被害者に寄り添った「慰安婦」問題解決を目指す上で是正されなければならない部分である。

また、「被害者視点の欠如」という点では、韓国国内にも同様の指摘ができる。作品内で読み取れた韓国国内の状況として、現代も残る家父長制が「慰安婦」被害の名乗り出を抑圧しているセカンドレイプ的状況と、当該問題への責任所在を日本政府に限定する一元的状況が挙げられる。イン・ミョンオクの母が受けた「お前はそんなところ（日本）に連れて行かれたから子どもなんて産めない」という言葉からは、強制連行被害者のみを擁護し、その他のケースで被害にあった女性には蔑視の目を向けるという韓国社会の根底に眠る家父長制意識をみることができる。戦時中の日本軍は、朝鮮半島の家父長制と既存社会システムを利用することで「慰安婦」制度を確立させた[3]。つまり韓国の家父長制は日本軍に利用されたのであり、韓国側が「慰安婦」問題の戦後補償責任を日本に求めることは至極当然である。しかし「慰安婦」制度に利用された自国の家父長制への反省と理解もまた、被害者の社会復帰と尊厳回復のためには必要な過程である。日韓双方が自国のナショナリズムを超えた「被害者視点」を獲得することが、「慰安婦」問題の立体的構造把握と多面的アプローチによる解決に繋がっていくのではないだろうか。

現在「慰安婦」問題の争点は、「そもそも本当に被害を受けたのか」「日本軍の関与はあったのか」という国家威信をかけた外交問題へシフトしている印象を受ける。フィリス・キム（Phyllis Kim, 1970-）[4]も言及していたが、何故歴史の被害者であるハルモニたちが、自身の尊厳回復を求める裁判にて、過去のトラウマのフラッシュバックや証言の非一貫性を指摘する加害国側からのプレッシャーと闘わなければならないのだろうか。加熱する「慰安婦」問題の論点を、ハルモニの尊厳回復と社会復帰支援の部分に戻していく必要性に改めて気づかされた。

以上の理由から、本作品は日本政府の戦後賠償責任を明らかにすると同時に、日韓両国に欠如した「被害者視点」獲得の重要性に気づかせる革新的且つ挑戦的ドキュメンタリーであると私は考える。

栗山 海陽旅（くりやま みひろ）（上智大学外国語学部学生）

[3] 上野千鶴子，2012(1998),『ナショナリズムとジェンダー　新版』，岩波書店.
[4] カリフォルニア大学卒。現在は Comfort Women Action for Redress & Education(CARE)エグゼクティブディレクター兼活動家。